論壇

『原発はイヤだ!』でも…

茨城県保険医協会理事　久松　雅彦

2020年は、いよいよ東京オリンピックです。これから日ごとにムードは盛り上がり、日本中がオリンピック一色に染まることでしょう。ぜひ成功してほしいし、できれば私も、何でもいいから、東京オリンピックに参加してみたいものです。

しかし、東京が2020年のオリンピック候補地に立候補した時、安倍総理が応援演説に駆け付け、「原発は完全に安全な状態にコントロールされている」と明言しました。本当にそうでしょうか?

先日、所用で福島県の郡山市の近くに行きました。山間部のバイパスを車で走っていると、高台に沢山の新築住宅が立ち並んでいる光景を目にしました。地元の人に、「あそこには団地ができるのですか?」と聞くと、

「違うよ。あれは原発事故の避難民用の仮設住宅だよ」と。

「えっ、あれが?」

仮設住宅と言えば、マッチ箱のようなプレハブの建物が並んでいる光景しか思い浮かばなかったので。でもそこに見えている家は、どこから見ても立派な一戸建て住宅。もし、同じものが市街地にあれば、おそらく一戸3～4千万円程度の値段で取引されていることでしょう。要するに、この住宅に入居する人たちは、仮設とはいいながら、永久に（一生涯）ここから動くことはないと見込まれた人たちなのでしょう。新築の家と引き換えに、故郷を捨てなければならないというのは、いかなる心境か・・・

確かに私たちは、東日本大震災での福島第一原子力発電所の事故で、原発の恐ろしさを目の当たりにしました。

そこで、代替えエネルギーとして考え出されたのが、風力発電や太陽光発電などの自然エネルギーです。二酸化炭素を一切出すことがなく、重大な事故が発生する危険も少ないということで、国を挙げて自然エネルギーへの転換を図ったため、日本中に、一斉に風力や太陽光の発電施設が作られていきました。私の住んでいるところは、県内でも有数の農村地帯なので、周囲は畑と山林ばかり。次々と畑の中に太陽光発電のパネルが並び始めました。

最初は農業人口の高齢化が進み、後継者もなく、このままでは荒れ地と化してしまうであろう畑が、日本の将来のエネルギー需要の担い手となれるのであれば、これこそ一石二鳥ではないかと感心していたものです。しかしその後、太陽光発電は設備さえ作れば、必ず電力会社が決められた値段で電力を買い取ってくれるということで、企業までが参入し、銀行は太陽光発電への融資を促進し、あっという間に営利化してしまいました。最近では、畑がなければ山とばかりに、周囲の山林を切り開き、更には山麓の森林を伐採してまで太陽光発電を始めるところさえ出てくる始末。

でも太陽光発電って、二酸化炭素をださないことが長所だったはず。いくら二酸化炭素を出さないからと言っても、二酸化炭素を吸収して酸素に変えてくれる樹木を伐採してまで太陽光発電を始めるようでは、果たして良いのか悪いのか?　結局、自然を破壊していることには変わりがないように思います。もちろん、営利目的で太陽光発電をやっている人たちを非難するつもりはないのですが、人間の所業とは、どうして、こうもかみ合わないものなのでしょうか。

今、日本は、自然エネルギーから再び原発にかじを切ろうとしています。このままでは、またもや同じ悲劇が繰り返されそうで。誰か、いい考えはないですかね。